



中村俊定文庫
文庫 18
688





續猿蓑集卷之上



芭蕉

ハルらゝんてゑ修ら松る

まのうしに白田あらあ

お高とら馬子ものこゝれ馬子織て

のをやまゝつゝ晩のほろひ

まのふゝゝあゝあゝ月の色

お脊あゝれて肌をまつたろ

沾圃

馬寛

里圃

祐

蕉



淡柿も〜を風にあたり
孫う臨とら 祖文り 借涉
服指に貼てあう孫 刀
蜂ふ志あゝをとも 蘇の所
孫米の小さむ一七ヶ賣にまて
十里をうと孔余所へあうと
蘇の蘇に山海埋てあうと
あゝはあゝつたあゝの書りり

蕉 佐 里 寛 佐 蕉 里

所々う極る所はたゞの物場を
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
伊勢の下向に属するあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

蕉 佐 里 寛 佐 蕉 里

禅寺に一月あそぶ砂の上
柳のう角乃をてぬき丸
後わしの半に傳ふまゝや
やれぬ娘みえうすむ禮
月待よ侍もまのころころひ
雛のう氣孔もあそぶはし
中れて来てあそぶもねもさく
伴傍もころあそぶ乃りわん
蕉 沓 里 覓 坂 蕉 覓 里

削りぬき力坂のあそぶ
あそびいたるあそぶあそぶ
引立てあそぶあそぶあそぶ
そのと火入よあそぶあそぶ
あそぶあそぶあそぶあそぶ
あそぶあそぶあそぶあそぶ
あそぶあそぶあそぶあそぶ
あそぶあそぶあそぶあそぶ
蕉 沓 里 覓 坂 蕉 覓 里

馬寛

雀カラの字や拵めて保るものあり

しらぬの岸のあそび

あそびを習てしるは秋葉て

物にしるはあそびのそと月酒

あそびを習てしるはあそびのそと

あそびを習てしるはあそびのそと

佐圃

里圃

寛

佐

里

悔とさるるもの一歩のこころを
懐かきんてたまらぬやう
あふくは旅業家のち氣
あつりきつる國方乃客
何をたたくてあつたか
風よこめつわらお輪の輪の
意新秋のほろほろ
一歩のこころを
旅のこころを

ゆるる伊勢の幸洲のや
妻をきくはわらぬ一
信来と志ちりて二重き
ま静なる草一乃 係纏
雪のほろほろ雪は掃
まぢぬ合点てかめて
よこしたるうらわさ
と静寂のこころを

旅 覓 里 泊 覓 里 泊 覓

覓 里 泊 覓 里 泊 覓

汁のさきよとちうちのちあて
あゝあまさを川刈てとあ
にしに寺の栴圖をちあて
房のおさくあをちあて
隣りてあゝあをちあて
早下りてなよよの軒
肌入て秋にちあて
あゝあをちあて

里 佐 寛 里 佐 寛 里 佐

けら盛を寶の母おと向て
あ付てあ ちあて
あゝあをちあて
あて氣味よと 杉南の風
あゝあをちあて
あゝあをちあて

里 佐 寛 里 佐 寛 里 佐

~~~~~  
あゝのあゝあゝのおおあゝあゝあゝ  
大根の~~~~~叔土の梅~~~~~  
上下~~~~~もに松~~~~~あのみあ  
漸切のみ月足の方の集あ殊  
あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~

里圃

沼圃

芭蕉

馬寛

法

里

六

六



糸思能の響り糸鳴極りて  
 流く糸鳴を楓わやく  
 廻の鐘又糸をうけたり  
 月利て空をよみたり  
 状節を流河の飛柳種より  
 伊弱氣つふ糸とりの糸  
 岸の糸よとち糸の地ちまり

流 貫 里 流 貫 里 流 貫

うき旅を懸とつ糸立流りも  
 糸鳴くくく糸鳴くくく  
 糸舟の糸の申より流り糸  
 極の侍へ行をきとてりり  
 糸想の糸よりてつらとて糸糸  
 糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸  
 糸糸の流糸糸糸糸糸糸  
 糸糸の糸糸糸糸糸糸糸糸糸

流 貫 里 流 貫 里 流 貫

ゆきよしの藤の申の絡線の  
ふきよ人うひちをそと 匠  
火雄の火いけて携手持持し  
一ふゆ〜 唯乃来  
折しを案月の起るまは  
御に加減乃ちのあき  
月あきよも〜いぬとひあて  
おもひのあにあぢてあぢ

里 佐 苺 里 佐 苺 里 佐

ゆきよ娘をわけて娘のさこ  
まよあとのさよまこらてはま  
たのおと躑躅の〜ねんか  
寺のひけ〜らふ保のま  
あよりあし〜らり也の甲  
一ふ降てあ〜らあ風

里 佐 苺 里 佐 苺

猿蓑にもれさらおの松蔭外  
身を空よりれと静なる窓  
水かき池の伸りるありて  
隙竹まは家まをいれ  
鷄あうらやうそまの月  
つるらにわらわんをうら

佐圃

芭蕉

支考

惟然

蕉

考

ふ血志まじし一花あてまきさる朝の魚  
 不空を採の癖まじしくまきり  
 智々々身てゆ川ともせたり物使  
 申国よりの杖のまらたを  
 朝日の月をさくやう振舞  
 一言に相織り来てまじりぬる  
 きさきやなまきさるの比の根根  
 らに門あらしむるの月  
 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然

幼あり一畑の人のうけおるを  
 ぬ像さる候り小翳  
 見てゐる記と舞をたのまかた  
 肩持ひとりよまじりぬる日  
 さら風の又まじりぬる北にまじり  
 わらば手に脈をちまじりぬる  
 故年の旧保をまじりぬる  
 室へ入るまじりぬる  
 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然

大せりなるはうなるあまの種  
 雪うさふ——甲のころを  
 まらねの葉掛を皆あま  
 園のせををよの作  
 酒ありとも有のやよふ月にて  
 赤鶏流をよる 西面  
 うらぬ路のころをよる  
 平標汗のよるよるよるよる

蕉 考 然 考 蕉 然 考 蕉

もろをよるよるよるよるよる  
 大こつうひの園よるよる  
 来摺もよるよるよるよる  
 うらぬよるよるよるよるよる  
 けあまら油をよるよるよるよる  
 鴨の油のよるよるよるよる

蕉 考 然 考 蕉 考 然 考

今宵賦

野盤子

支考

今宵は六月十六日の夕々々あまのあけひ月  
 東家の礼山よあけて衣裳の湖あのか  
 子物くむされを今宵の阿そひそ〜先り  
 尊卑の席を〜志〜敵て  
 ~~~~~  
 ひらぬおのきぬ〜あ〜りた〜人〜
 さ〜ん人き真と〜先〜ら〜んあ〜福を

たつらよ糸のあつてはもかちん竹岸
のよのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
よのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
よのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
よのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
よのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
よのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
よのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
よのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
よのよのいりいりあつてはもかちん竹岸

竹岸

あつてはもかちん竹岸のよのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
あつてはもかちん竹岸のよのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
あつてはもかちん竹岸のよのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
あつてはもかちん竹岸のよのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
あつてはもかちん竹岸のよのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
あつてはもかちん竹岸のよのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
あつてはもかちん竹岸のよのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
あつてはもかちん竹岸のよのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
あつてはもかちん竹岸のよのよのいりいりあつてはもかちん竹岸
あつてはもかちん竹岸のよのよのいりいりあつてはもかちん竹岸

ろろろ色人の歌よろひておあへ次窮
 等て月のかゝめより作やすして蒙る
 比を阿婆やたまむくのまこと心こころ
 されしをま支るを心路のまよひ作ら
 おて耐るの比をま久心作らもおめなり
 志くを湖のあまのやうをま〜〜〜
 わられて心川ヶげ阿婆ひおあ〜〜〜
 のと背をまの〜〜〜心作らにま〜〜〜
 ら次々まの息の宴何そあ〜〜〜
 頼ん

ろろろ酔て移るるものあ〜〜光爵座の飛
 めのまのま〜〜とた〜〜あひぬ

芭蕉

ちのむやあて〜〜
 露を〜〜〜蓮の根先
 雪の〜〜〜の移るまよひ入て
 ちき華露よ互故柳〜
 月影のちもちうよる雪のそ
 志くめて隣まらら 蟹馬あよ
 芭蕉

栲子栲場の卯へ追みか
 山々々々れ名をさして
 飯櫃ちる面桶もそと
 寫て工又をさして
 おれう夏あ身あ栲うく栲の事
 持仰のうあよう又は日さ也
 平田よ葉を荷き
 軟風こころの在風品
 然
 考
 考
 蕉
 考
 然

馬りて旅ひぬる月の乾
 危弛てつきしものあらら
 歸好のこしに花ありて
 月まのく襟もよささく
 暮風よ善徳のほもいはや
 暮々村あけらくさ
 喰ふぬ音も響もこいて
 何その町をら依よちら
 蕉
 考
 然
 考
 蕉
 考
 然

世はさき持の付くらをさき
 蔵こいつら種月明く末
 お前を臨先よす川矢木の町
 除の日はよ雪り氣を
 春ころと身とぬ酒のりはぬ
 云かえのちをよあくら
 封付—又前まら月の時
 ころ—ありく壺の上高れ

蕉 高
 高 蕉
 蕉 高

虫籠つら四角の角の何系所
 ころ階をあらる表 一固
 々のつらよ徳をえくくは格の上
 大やな徳のこんよけりゆる
 蓋ちるる花のの能おあをて
 藤うけつら—さぬ根の下

然 高
 高 然
 然 高

續猿蓑集卷之下

春之部 花梅

平流流

温ふのあつこいあつたを山梅

其角

寝付ふに又も寝付ふは梅

芭蕉

ちよと通やあゝの般らるゝたのみ

洞木

角の流し入まか

女

花散て竹の軒のやすき花

酒堂

高貴なる酒名よあまらして又君

の血もた酔のまゝいれよ思ひ

~~~~~

酒鼓名よ琴の音と空の花

惟然

賭みして後あまれりしうづ務

支考

人のまむわく窺りしを川橋

依徳

うらやめ思の中一のたの水屋

猿雖

七山よりたるともあはれ申の

陽和

らる所おあまらぬを川橋

乙州

咲花をまらりしきなら老木小

木菰

あなやあまらるるを川橋

依荷

二の腹やあまらるる調の曇

子珊

葉玉のあまらるる様うね

卓袋

田家

菖蒲のよおやあまらるる様

木李里

咲ゆらるる飯茶又十ふ

桃着

一桐の影より  
 花の影  
 其角  
 一ツ馬  
 卓袋  
 沾圃  
 全

名茶

濡椽や竹林のちりくエ  
 夕波の舟よそ  
 一かめの牡丹を  
 尾頭

梅附柳

野水  
 芭蕉

守梅のあまひ業やりり野老賣  
 里坊も確まゝやかゝる免の石  
 投入や梅のわきまを後のひき  
 一病僧のなまぬ梅のさかゝり  
 あゝし記のあまふさゝし梅を  
 萬のや梅の陰さして下弦の梅  
 まゝ梅やさゝしゝまゝあまふさゝり  
 霞所や梅のあまひまゝを落ん

其角  
 昌房  
 良品  
 曾良  
 万平  
 魚目  
 千川  
 大丹

天竺のやー海み防て

身ものまゝやめや梅の羅くん  
 うれし此戀のなりやせさ柳  
 付くまゝあまふさゝり川やり美  
 ちう道を教くちうや古柳  
 青梅のまゝれくゝせや馬の曲  
 痛をうけてるあまふさゝり梅くね

遊泉  
 千ね  
 意え  
 李由  
 九七  
 巴文

鳥 附魚

其角 ナケシ 其角 其角

史邦 史邦

智月 智月

芭蕉 芭蕉

去来 去来

西堂 西堂

傘下 傘下

長白 長白

野臺 野臺

少年 少年

峯瓦 峯瓦

槐市 槐市

何瓢 何瓢

釣帚 釣帚

土せり 土せり

圃水 圃水

五

五

きくしのしめしめりけいめい  
山蜂 子珊

きくしのしめしめりけいめい  
山蜂 子珊

きくしのしめしめりけいめい  
山蜂 子珊

きくしのしめしめりけいめい  
山蜂 子珊

川流や流まやまらあーの角 猿錐  
 牙の歯まらやま筆の毛ー 扇指  
 味ひや梅のうたよーあうま 車来  
 羨とー咲係かしのも思あー 荒雀  
 埜ありーらひさるれまーれ小 馬見  
 醜あーれま埋の切月や落の響 拙作  
 ぬーあめ形よーるまーれ工ち根 乃龍  
 早蕨やままどりーら乃根ー 正秀  
 ーら新鬼のあひま肥るまーふ小 夕可



目のかよふ猫の爪は櫻屋の  
蒲の葉やまゝのまゝくつら

一桐  
園菴

猫息 附胡蝶

まゝのや月よなきは啼猫の息  
うよあよよめてや猫の盗喰  
おもひこころにまゝめけり

探丸  
支考  
已百

夜月志川うた

あつかりても翅を動かす如く

柳梅

衣よるのくまやまき鶴の海  
蝶の舞おつら様よくはるま  
風吹よ舞のやまろく小蝶うら  
まを新して花み路り

惟然  
園指  
あつま里り  
雪窓

春鹿

振おしりや度海しの鹿の角

沢雄

まき耕

お福のちかあてまゝくつら

木名

苗れや三途とよ北看月お  
千刈乃回きかつはかり難波人  
い篇  
海鳥

桃 附椿

白桃や志山くも落はるのそ  
金杯をさこ盃なり桃のそ  
休んやうき葉の枝の上の露のそ  
梅はくく申をさるまに桃のそ  
花さるる桃や奇舞妓の腸躍  
桃隣  
介我  
雪芝  
水鷗  
其角

は東のさき由ら祖父の懐のほろも  
れのかし経文題のちりり一休院の  
光明とての事を

小服紗子光をやと路玉はほ  
種を枯しさるる花咲桃のそ  
取あけてるるや梅のちその宛  
ちるる梅ありもろそに孫てるる  
角上  
砂香  
洞木  
野坡

款冬 附躑躅藤

山吹や垣み千ころ叢一重  
園枿

巻下

田家乃人の對て

山吹もあろろ糸糸解たまん  
 塀おろんはくし糸株や餅のま  
 家晴や穂まよわゆるあの花  
 荊口  
 雪堂

まき月

山の端まろろ只なりまき月  
 魯町

まき月附春雪蛙

抱よの草のむらりやまきのる  
 啼と調子合らまよまきのあめ  
 まき月や唐丸あろろまき月  
 遊刀

まき月かしの馬の武にり  
 猿と店をまき月かしの附

まき月や杖の山ろろまき月  
 まき月や光るまき月  
 津重やまきの通るまき月  
 水はくや蛙の居るまき月  
 風考  
 桃首  
 風麦  
 風揺

改干

乃ちあり枕の清涼なるれぬ改干作  
ふ川よ富士の麓をよ志おひの  
去来 園坊

雑春

空おりのやあそいれ袖をよ加帳  
ささきのやあそいれ袖をよ加帳  
思ふこのねめろくらやわりく縁  
うけろくや巖よ腰の掛ちあへ  
許六 風臨 土芳 配力

わま花ちあそいのころや洲治の家  
あそい毎に移治やあそいや市北中  
木の葉よ川岸かへぬやめけよ  
まきのやあそいの木の申れあそい  
とくらの裡へあそい申すまの他  
りもあそい申すあそいや田圃より  
万手 玄蘇 均水 正秀 仙化 支流

三月書

熊よあそい白角賣れ名跡なる  
支考

景目

まのむらさきくさくさ上落次 り年 武仙

遠きまのむらさき立所外 百歳

まのむらさきくさくさの里はま 尚白

まのむらさきくさくさの里はま 圃高

母のむらさきくさくさの里はま 山峰

はまのむらさきくさくさを顛倒して

まのむらさきくさくさの里はま 千川

人まのむらさきくさくさの里はま 芭蕉

まのむらさきくさくさの里はま 其角

まのむらさきくさくさの里はま 山崎

まのむらさきくさくさの里はま 去来

まのむらさきくさくさの里はま 土芳

まのむらさきくさくさの里はま 風騷

まのむらさきくさくさを

まのむらさきくさくさの里はま 猿錐

子代ゆえす川曲順やまゆり

鳥平

脊きりく切の物まをさくや花の

野寺

止園のまをたふじ白尾の朝の

耕雪

縁の書員のをまをさくやゆり

た板

く川まやゆき若後の白比丘を

前川

枇杷のまをのりくやゆり

科巖

世の業や聲きあはれものさる

山崎

濡いろや大あまゆりのゆり

任行

えりやまをさくやゆり

竹戸

我やゆきくゆり鏡すまゆり

是乐

搦薬や餅もやまゆり

沾圃

画あめり花白ゆり

圃角

まゝ部

暮ら

暁の雲をらとめをわ〜ん

其る

は〜んをらとめを満水の〜ん

たろ

ま〜んをら何をもはら〜ん

角ら

蜀嚙〜んぬおま〜ん

支考

鳴〜んぬのなま〜ん

如雪

舞の活〜ん〜ん

其ら

信よりのもおもひぬよちけし子親

けりたる山の栴麻めて

頃れりかて通りたると也

郭るかきひの栴麻や中やとり

沾圃

木附草花

橙や月あつめれとるさあま

園指

里ししの波せうりぬまのあまら

野茨

園中 二句

け中の右木をうりぬ柿のた

け柿

手切のき木も柿のききふ外

千川

姫百合や上ありさあは殊のふ

孝龍

豊山宮へ百合

あ〜ちや〜ま〜ま〜百合花

支考

ふ〜んよの〜れ〜ま〜し〜

尾頭

冷汁をあくすま〜り 杜若

沾圃

手のと〜れ〜ゆ〜れ〜 杜若

イカ 宇多都



いさよあやせ花子のたをきんさく

拙侯

いさよあやせ花子のたをきんさく

昼もあやせ日きうあせのたをきん

花圃

夕起や酔てあせのたをきん

芭蕉

夕起や酔てあせのたをきん

芭蕉

露のたをきんあせのたをきん

芭蕉

蘭のたをきんあせのたをきん

芭蕉

蓮のたをきんあせのたをきん

芭蕉

客あやせいさよ蓮のたをきん

良品

凡

朝露のたをきんあせのたをきん

芭蕉

花あやせあせのたをきん

芭蕉

凡

花あやせあせのたをきん

芭蕉

子苗

糸入やも羽の風柱の響中  
早乙女も踏んでやんまのふ  
ゆとら男の柱おくれまふ  
回柱寄まてやら歌の風ひ  
一風はくりわくうてやぬの  
里の子ゝ燕振る子あふ  
段連火の烟おそくあつら

螢

知七  
園指  
魚目  
重り  
少枝  
まき  
許六

三月にまの螢を照り

細涼

野菰

涼しき竹揺りし萩は  
可花菓や唐菜にわく夕涼

半残  
唯然

海川の音も帯

涼しき竹揺りし萩は  
可花菓や唐菜にわく夕涼

史邦  
を翠  
杜年

涼—さし半紙尾振て川の甲 万平

漫真 三句

腰かけて申れ涼—ま階子外 西堂

涼—さや椽より豆まぬ 支考

せ碎まゆりましくあしう涼うな 雪芝

まよひるま

茅屋のまよひ

涼風もあま—と恐ろのこりれぬ 游刀

ひそか—身申まぬけさ涼う船 全

立寄りく人よまをれてすま— 去来

黙然よこまら涼—やるの上 正秀

職人の帷子—涼夕— 上芳

涼—さや—さ羽織の風— 我眉

あ涼や—さ—の—月— 里圃

盛る

か—さ—や照りか—庭の隅 野菰

木子盛る—の—の暑外 万平

我輩醫者の心も先ずきり  
よき事なすべし

之等のものやを捨てて病冷の思

正秀

取草の内のあつさや梅はくひ

乙舟

煤とらる目も遠らつ—  
尾張 壬辰新

怒風

茨ゆの垣も志あつぬ  
尾張 壬辰新

壬辰新

糸のさや目者も月にはあつた

我輩

何つよりや<sup>尾張</sup>扇をうたふはあつた

下宮

積あけて思ふ心やあつた

車宮

粘りたる地もおのつた

里東

立寄れさかしくはあつた

沼園

舟のこ

省に思ふ心も岸の思ふ心

可誠

志行や烟の心も庫裏の窓

曲翠

五月雨附々

志行や<sup>尾張</sup>扇をうたふはあつた

不玉

志行や<sup>尾張</sup>扇をうたふはあつた

芭蕉

尾張下

五月もや薩もこれ女磯にさへ

佐園

夕立よそ一合まり自傘

拙依

白るや蓮の葉もさへ池の

苔蘇

夕くらやちりしけさ竹の皮

曉鳥

仲のまら傘のさるやまの所

圃水

碎

白るや中房りて雫のあつ

正秀

さしとよて啼て去りし船の急

胡故

森の雫涼しよぬやほつとあつ

乙州

鯉啼やぬの擲るさのさつはつ

曉鳥

うしあ

池の月や潮さあつとつづ

葉蛤

雑な

ささや懐して手の動やせつ

杉風

雲の霞ふさふ葉やあつ

荆口

えん獲も孫くひの申のさつ

知真



携り下

十五

穂う部

ふ月

ふ月

ふ月に穂麻のふちや田のふち

ふ月の花をふちて穂高

ふちの二句をふちて穂高  
ふちの二句をふちて穂高  
ふちの二句をふちて穂高  
ふちの二句をふちて穂高  
ふちの二句をふちて穂高  
ふちの二句をふちて穂高  
ふちの二句をふちて穂高  
ふちの二句をふちて穂高  
ふちの二句をふちて穂高  
ふちの二句をふちて穂高

ふ月

ふ月

くさくと園位ありーのふらりやさけ  
秋原をこぎつらとふらりて平田  
渺しと思ふらるるを老杜の唯を  
ふらりてふらりてふらりてふらりて  
へーつれ次の櫛をけきさるる  
を腐りてふらりてふらりてふらり  
このふらりの一篇はふらりてふらり  
うらりてふらりてふらりてふらり  
やらりてふらりてふらりてふらり  
はらりてふらりてふらりてふらり  
はらりてふらりてふらりてふらり

き前の寂寞をふらりてふらりてふらり  
ふらりてふらりてふらりてふらり  
ふらりてふらりてふらりてふらり  
ふらりてふらりてふらりてふらり

支考評

名月の海より冷ら回葉う飛 酒堂  
明月やふよあつれを飯屋のつき 知行  
ものしひら根やせん月足り 霞居







深川の東ふかむとみ所よ  
ぬをききて

川ふかむの川きもや月のな  
十六あむちり川うら園のゆめ  
ふかむひの園のふもやうらむのな  
猿雖

七夕

ふかむの川きもや月のな  
十六あむちり川うら園のゆめ  
ふかむひの園のふもやうらむのな  
猿雖  
惟然  
東潮

ふかむの川きもや月のな  
十六あむちり川うら園のゆめ  
ふかむひの園のふもやうらむのな  
猿雖  
乙州

立秋

ふかむの川きもや月のな  
十六あむちり川うら園のゆめ  
ふかむひの園のふもやうらむのな  
猿雖  
尾川  
尾次

編み

ふかむの川きもや月のな  
十六あむちり川うら園のゆめ  
ふかむひの園のふもやうらむのな  
猿雖  
尾川  
尾次

ずらたわひぬ馬骨の筭ひ  
 濁子  
 まさたけ 鶯の杖のまへに  
 馬草  
 一筋をうたふまらり 烟を  
 鳥粟  
 弓園とら比たれやなまらぬ  
 支浪

贈芭蕉

百合をうたふ花をうたふ余ら  
 風夏  
 けの姫のちやまもはしはまに  
 史邦  
 枯のちやまもはしはまに  
 万幸

鶏のやうのまら時わら  
 芭蕉  
 鶏頭のまらまらぬ目ねり  
 至曉  
 折しや雨にまらぬ枝の  
 雪  
 まらまらぬまらぬ秋の風  
 荷分  
 山人のまらまらぬまらぬ  
 柳秋  
 風をよまらぬまらぬ  
 杉下  
 朝のまらぬまらぬ  
 朝下  
 朝のまらぬまらぬ  
 朝下

甲上尼

あさくちの這ふてきつる板を

扇振

ふももはあさくちもて湯の舟

風姿

朝空にきつるれ一人や笠帽子

其角

虫附鳥

さくら〜〜に傍に経る可南

可南<sup>サ</sup>

電馬や都よあつ〜〜の棚

小枝

火の傍て飼ふ〜〜のち〜〜

正秀

秋のおやま〜〜と〜〜

水鷗

〜〜の虫や形よ似合〜〜の糸

杜若

磯のや何の味ある草の先

探丸

襦袢や服をちやけらるゝ

葛葉

蓮の葉に舞う〜〜の

示峯

あけあ〜〜ひて死る秋の

大子

馬にゆ〜〜浦の音なり

馬見

鶴鴉やきりきりは戸川

水固

葉の粒をえあ〜〜時や啼鶴

支考

若のふれ〜〜四十雀

芭蕉

福凡

秋う勢や二事留りては時  
 雀子乃聲もささやけの風  
 何ぢうかあぢうかぢうか  
 木の葉やささやけの風  
 ちのしう〜平のささやけ  
 ぬん〜ささやけの風  
 あれ〜てまき海や四方程

遊刀  
 式之  
 支考  
 風国  
 圃燕  
 ぬぞ  
 猿雛

福妻

猶よる守との〜福の風  
 福妻やささやけの風  
 明ちのや福つは房ささの端  
 山那はよや園のささやけ  
 木實 附 菌  
 園果のささやけ  
 炭焼にほ柿たのおぼろ

一東  
 字比  
 土せ万  
 芭蕉  
 為有  
 玄虎

秋の月おろろは掃のりろ 酒堂  
はぬしきき帯ももろく梅外 とき  
も川草や地もはる一盞 花園

伊勢の山中よは夏の  
実を結ひて

松草や地もらるるの形 惟然

~~松草や地もらるるの形~~

中川草やきぬぬ木の葉のゆるり 芭蕉  
楓

後庭の塚よとれり村のまゝ 小鯉

麻

あすちにおのの麻や海の方 風睡

森わつらよ麻おろろ守りよ 一敵

農業

起しほくを逐りりきるまの 車廂

木の下に狸やらぬ種魚うね 買山

さほくげらるるものあま 時のか 知雪

さほくげらるるものあま  
時のか

葛の葉をさしてたてておいたもの  
 早稲刈て落つよふもの百姓  
 山雀のやま雀の種  
 ちりよしたる河を鵜ヒナよつた  
 一おれのやま雀の種  
 肌をさして始よあら  
 百ちりていさう物さるるか  
 大御所よあそひて持次と  
 つゆよの種よあそひと  
 そのほろやつぬれよつたの種  
 芭蕉  
 乃龍  
 斗從  
 支考  
 全  
 惟然  
 本之  
 占圓

蘭

葛の葉二百十目七番  
 ちりよつたもの玉牡丹  
 者木綿のやま雀の種  
 野益屏  
 ちりよつたもの  
 借りのけの種  
 葛の葉  
 玉牡丹  
 支考  
 支考  
 元峯  
 支考



唐江也背負ふて海を秋の暮  
野水  
秋を鼓うの糸の恨く船  
乙州  
秋を鼓うの糸を船うけうる船の  
芭蕉

雜稿

又六十海をばの船一て般いせ之道  
團友  
あゝ海客の群るのちうのわおきうま  
畦止  
秋の海  
はる秋也さる秋也る秋の海  
はる

身如ういに霞のさちち、靴の  
サ根子  
さうおや掃くの家の葉あゝ  
万幸  
柿のさあに焼くと煮くん尾箸  
東門  
字波  
いり馬、空に骸骨やも  
の笛鼓あうまてはゆる  
やまを盡して舞臺の燈  
うまうりあゝいんけさあ  
うめりあゝやとハこはあゝ  
よほんやかの髑髏を  
やゝて終よさうさうか

ひんじふもまこのせいのを  
あつむるゝあつむる

あつむる

穂ふゆあつむる

あつむる

あつむる部

あつむる霜

あつむるの霜のあつむる

野坂

あつむるの霜のあつむる

水枝

あつむるの霜のあつむる

芭蕉

あつむるの霜のあつむる

露沾

あつむるの霜のあつむる

馬草

車押よみなる廻らうらけあうな  
 柴賣やうらうらけのきり  
 椀賣もやうらうらけのゆめ  
 元徳のやうらうらけの能  
 うらうらけのうらうらけ  
 ぶよをてき野をぬらけの  
 柿包の目もやうらうらけ  
 うらうらけのうらうらけ  
 野萩  
 鹿川  
 里園

沖西の能目うらうらけの  
 うらうらけのうらうらけ  
 うらうらけのうらうらけ  
 うらうらけのうらうらけ  
 佐圃  
 如鯢  
 支考

元禄辛酉うらうらけ  
 九月廿五日里園遊

名傷の言やうらうらけの  
 うらうらけのうらうらけ  
 うらうらけのうらうらけ



うら—とぬ琴や作ぬ事あり

幸亭

草

みねや孫唄は月夜の透り

豊

なほ清く咲やよから水伝花

氷固

みねのたの〜れや萩のし

唯然

花露 趙南の〜

山家集の題より

一房もこちとぬ事の水く南

芭蕉

いよふ花をえり周くゆり花

車庸

みづ梅のちと川梅〜山也亭の

土佐

いよふ花もよめてや雪に花枝

露

木下 附冬枯

おひつり—木の葉から〜お徳の

お徳

星さえて江の甜さ〜お露の

露沾

冬川や木の葉を〜お露の

唯然

杖藜より足さりりいふさあのみ多し

杖凡

いむ杖藜字比の  
なまきりめりて

とらふより先かてらるる後まふ

一道

枯たてておれよたらぬをいふ

杉風

牛のけ送り枯葉のま

柳醉

冬枯れまふもてんてんな

乃龍

草枯れまふもてんてんな

利半

御も枯てのまはちり

支考

木やト也きものそん家もま  
風や背中吹く牛らあ  
木枯れや川田の畔の候ま  
こかト也や果まこちん牛乳角

智目

風行

惟然

塵生

夷講

ふひす梅酢賣み袴さそひ

芭蕉

ふひす梅酢賣み袴さそひ

利合

鳥 附いま

乃々の海まこて

塵埃よめくぬ目もぢー浦魚

白空

追うけて雲よころふ千まの南

葛草

かおらとくと庚申中ら死あな形

お草

入海也碓の釜に啼 千ま

園松

驚ケコロモにけくくぬくー鴨乃豆

芭蕉

く川鴨もた追うくまけくく水

乍木

扱はよころいひつふは海嵐を

三人 利雪

ううくや海月よまらるちまの

車庸

えく透や子持ひあのころ水

氷水

一壇よま川白魚や雪の前

杉風

かくぬ川や脈まぢーて降霧

拙作

杜夫魚を何脈の大ききそて水上まはゆみ  
都の川よのこあうくまぢー

冬月 附合

言もつちの賣ありくみのも  
 あつ指のわけもた軒やみの月  
 何まも藤入るまやん強めす海  
 の心や行きぬれま江の月夜  
 里圃  
 夫孝  
 巾春  
 支考

埋火

埋火物埋ちまき客の歌あり  
 佛一まゝあゝ志を燃ゆる火燈  
 自由な月もぬかひ玉の燈  
 芭蕉  
 桃先  
 同木

雪

ぬち物内に指あり夕つらるる  
 新々々々 月雪うすく酒の味  
 雪あゝぬ心ゆらゆらなまこけ  
 鶺鴒はゆらゆらなまこけ雪  
 雪垣あゝぬ人あゝぬあて  
 ぬくつちのまの雪をゆらゆらぬ  
 片雪も雪降あゝらすく儀  
 其角  
 全  
 冬来  
 祐甫  
 葛平  
 支考  
 圃吟



思ふはるのまゝにや月枝のふゆ  
髪利を降するまゝのまゝにけ  
伊加え大和をまゝにや雪のた

大子  
陽和  
配力

神樂

おゆふに萬とやまゝにや

史邦

神楽

倉時やうらうら子の神  
神あゝに干鮭賣をすまゝにけ  
娘入のしとさゝにや  
痕を送りうらうら子の神

路平  
馬見  
許六  
匠圃

煤掃 附辭

煤をまゝに嵐追のまゝにけ  
煤掃やあゝにやまゝにけ  
やまゝにけのまゝにけ

孫香  
黄逸  
米灣  
馬見

蝶々もやわらふれて四方評きし  
蘭如

蝶掃也折な一投臨く  
唯然

餅つふや火をかいてち男を  
伏水

餅はくやあくるの鶏の  
嵐蒙

ゆら搗の手傳ひよるや山伏  
馬佛

歳暮 附 正月の衣配

くねくね返も海老の市の  
角長

門砂やあきて志を手の洗ひ髪  
里東

賣るやとても  
草士

猿もあよのちり  
車来

大やや款子き  
万手

袴もぬ舞の  
孝由

年の市代を呼ん  
真角

おこちん小豆も市の  
正秀

引強か一は  
茨子

桶の桶のち  
猿雛

雑文下

天鵝毛のたぬきかていもの

唯然

侯初又筆を結してやの

けら名圖司呂ぬらぬらありあり  
のちろとて伊勢ももあつて侍り  
いとのやののちろあはれきよひ  
あつて今きたふ

人とさなり

盗人よあめいあもありきり

芭蕉

余所よ中絶てとんすのあはれ

支考

漸に病所や母ぬ子の中

土芳

高白

高白

桃後

桃後

山崎

山崎

利合

利合

雑文

中屏風に糸を挽くろ

軒嶺

拙作よ何風を吹く

土芳

井のあつたわらちろ

土芳

雑文

雑文

高き山のやうな村の長は

仙林

おもしろくはるまのうたげや土龍

圃仙

火煙より寝よけのあまの

雪堂

山陰や猿り尻揺くみ日向

コ谷

想ねよ人々の影のまじり

匠圃

いふ川やみづく影のまじり

杉風

釈教と部

附 追善 哀儀

涅槃

涅槃像ありて身も同じ

法圃

孫とん今や一歌手合は

芭蕉

山寺や猶守るはるねを

不撤

貪福のちとてはまゝに涅槃像

山蜂

権佛

確仙やけし〜あつたろ井戸の  
家花や仰らまゐて二と月  
催仰や秋迦と程安を徒才と  
曲  
不玉  
之道

三鬼冬

冷物ともな水とほ〜譯あり  
森乃々のあこしや〜魂多  
也信体や坊〜心をもあひま  
嵐  
去来  
法圃

甲戌の夏大津よ侍〜をこの

か〜の〜より消息を〜れられ  
を四里子ゆり〜と命を〜て

家あ〜〜なほよき〜聖の墓系  
芭蕉

悼少年 二句

う〜〜と物麻木の葉もおとれ  
その親をまろりぬ〜の子を秋の風  
唯然  
支考

うは〜〜と  
我が母に侍て

青のたを稔葉のこ〜らこの時り  
木花

とうろふや 糞毒やと 桶の水 去来

法苑珠

柚も柿もおろすれんり 法苑珠 法圃

臘八

鴈ささくろりてんれを 納豆汁 許六

何のあれかのあまよりめを 大吟傳 如行

洛東の真如堂に 善光寺 如来胸懐の時

涼しくも 野山よも 涼さなり 去来

あまの 山に 二と けい の花 智月

けい 煙や 家ま 川中なり 乙在 乙州

このあに 川 趣向 小や 富土 乙

手あま 朝の 涼さ 野坡

食堂に 雀 啼 たり 夕 時 毎 支考

旅く部

送別

え禄七手のまをさへて  
あまをさへて

まぬくに群るのふ世のふく程 荷ぐ

つらや柿喰ひありのたのど 惟然

許六

本房海におまゝの時

旅人のちるはも似よ推のた 芭蕉

留別

俚の惟然う空あり

古婦あゆら財

嵐やも 山立の草ひさかしのり

芭蕉

鮎の子にまゝに魚送るふのり

芭蕉

甲斐のこの婦よ訪らる財

はく類のいかにかゝる財

年ありて牛にやりにて草を食はる

木暮

船は舟は世をたぐる船は舟

野人

あつてもたつてつる川船や旅の者

野往

あつてもたつてつる川船や旅の者

あつてもたつてつる川船や旅の者

ろにまゝに谷地やりにてわが徳

多助

十圓の子の小は船よちり船の風

許六

大名の鎌倉にも船をよるおまふ

全

くは船をよる

とる一はちも船のまゝに船をよる

舟

はくもたつてつる川船や旅の者

猿雛

船のまゝに船をよる

我峯



おろしはなきてゆはあり 一 糸の馬 史邦

田國の心さし一も南し一存勢の  
こめくさつて

文彦の庵ちけき秋涼 立人 呂丸

我圃園つゝ丸旅の庵と程 佐圃

常陸の園は一あひひとらふ所よ

めまつてせとりあんとま

そのおもとあはれあふまてまを

くまをくま一お別財の軒の

下たあふつ 毎一と

根のたつる情や梅にせは粥 支考

を川流や道よとらふ 全

え禄とまの冬く葉海のまを

より武のまおまらくとて遊園

の驛 遊まらくとまらくと

宵かりてあふちの 一 地うね

たつて

續猿蓑を芭蕉翁乃一派に承  
何人の撰也と云ふを去るは近世の  
情伊賀と野狐乃見松尾ふり  
此評あり某二語を以て評して  
漸くその本のむかひをあらわ  
せし廣くそのむかひをあらわ  
す或いはけしきをいふ入るは  
くはらはるる評のすなはちなり

一、  
乃書  
とふ

之孫十一

かん

一



又日

